

文化庁

45. 8

〈月報〉

昭和45年8月15日 発行

編集
発行 文化庁長官官房庶務課
東京都千代田区霞が関3-2-2
電話代表 (581) 4211
郵便番号 100

—〈第24号〉—

(題字=今日出海 文化庁長官)



重要美術品 座鋪八景のうち塗桶の暮雪 (鈴木春信筆版画)

・もくじ・	
▽文相、飛鳥・藤原について諮問……1	▽地方芸術文化活動状況調査(一)……5
▽昭和45年度第二回文化財補助金……2	▽昭和45年度派遣芸術在外研修員……6
▽文化財保護法二十周年記念論文……3	▽国立博物館・美術館だより……9
募集	▽随筆……10
▽第20回全国・第12回ブロック別……4	▽美術の著作権(著作権シリーズ)……7
民俗芸能大会	▽佐藤総理・オーストラリア科学……8
	奨学金授与式
	▽大学教員のフランス派遣……8
	▽文化庁日誌、人事異動……11
	▽海外からの来訪者一覧……8
	▽文化庁日誌、人事異動……12

近ごろはあまり映画を観ることが少なくなったが、日本映画の時代劇を観ると、画面にでてくる建築セットに対する職業意識が働き、作品鑑賞とは別の批判ができるのは、まことに因業な性分だとつくづく思う。「赤ひげ」や「用人棒」など、江戸末期ごろを時代背景にしたものは、観ていても、まだそれほどの矛盾を感じることもなしにすませることが多いが、やや時代がさかのぼるものになると、うるさくなる。「風林火山」、画面に城や御殿が映しだされると、もう気になって、これではいいのかと、首をかしげたくなる。

時代考証

「羅生門」は戦後の

日本映画の秀作で、

外国でも賞をもら

口健二監督のものは、ほとんど安心して観られた。同監督

い、日本映画の優秀さを国際的にも認めさせた作品である。なが雨のつづく戦乱に荒廃した京の街が背景となり、荒れはてた羅生門に雨やどりした三人の男の対話から、この映画の物語ははじまるのだが、まず羅生門のセットが気になった。丹念に作られていたものの、屋根が崩れ落ちた門の、その壊れ方にやや不満を感じた。ついで、しのつく雨の夜景のなかで、地面を叩く雨しぶきのなかに、屋根からころがり落ちた鬼瓦が見えてくる。ひとときわはげしい雨足。そのしぶきに叩かれる鬼面のクローズアップ。この一カ

ットは、効果的な印象を与えるための、計算された構成によるものであったはずである。ところが、多少の知識のある者には、その鬼瓦はひと目で判る江戸時代末ごろの姿をしている。この場合、平安時代の物語にふさわしいそのころのかたちの鬼瓦であってほしかった、と思うが、わざわざ江戸時代のまじい鬼瓦を持ち出して、大写しすることはないではないか、というのは、こちらのひねくれ根性だろうか。このような作品のなかで、「雨月物語」「近松物語」など、溝

日名子元雄

の教養と努力の成果だと思ふ。最近評判

になった「心中天網島」のように、舞台セットを含て、すべてを象徴的な表現に託した場合は、細部の時代考証は無意味であろう。しかし根底にしっかりした基礎がなければ、表面的な思いつきにすぎなくなる。歌舞伎芝居になると、時代ものでも話ががちがってくる。「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」その他いづれをみても、二〇三高地盤とミニスカートが同居しているような、徹底した時代無視の奔放さは、むしろ、わたしのような根性曲がりも、氣を楽にして、のんきに観ることがができる。(文化財保護部建造物課長)